

フランスの大学都市と国立図書館を訪ねて

- 海外研修報告 -

茨城大学図書館
奈良橋 敏郎
(Toshio Narahashi)

1. 日程

2008年2月27日(水)～3月4日(火)

2. 訪問先

- ・パリ国際大学都市 (Cité internationale universitaire de Paris)
- ・フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France)

3. フランスの教育制度と高等教育

フランスの教育制度は5-4-3制となっており、小学校にあたる初等教育が5年、中学校に相当する中等教育の前期が4年、高等学校に相当する中等教育後期が3年である。義務教育は初等教育と前期中等教育の計9年となっている。飛び級や落第があらゆる段階で認められているため学年と年齢は必ずしも一致しない。初等教育後期を終えると高等教育に進むことができる。フランスにおける高等教育制度は日本のような一律のものではなく、一般研究から応用・専門特化したもの、期間も長期から短期に至るまで複雑多岐に渡っている。ここではその中でも一般的なものを紹介する。

フランスではバカロレア (Baccalauréat) と呼ばれる全国統一の大学入学資格試験が存在する。非常に多くの科目を課す厳しい試験であるが、これをクリアしなければフランスでは大学に入学できない。また、バカロレアを取得した後に進むコースは大きく分けて以下の三つに大別される。

- () 大学 (Universités)
- () グランゼコール (Grandes Ecoles)
- () 高等専門学校 (Ecoles spécialisées)

大学については日本のそれと大きな違いはない。日本同様、多種多様の分野

の基礎応用研究教育機関として存在しており、研究者の育成にも力を注いでいる。日本と異なる部分としては、大学の実に 9 割が国立であること、費用面では国立であれば登録料がかかるだけで授業料は無料であること、外国人留学生の数が多くことといった点が挙げられる。外国人留学生の数は日本とは段違いであり、学部学生でもそのうちの 1 割以上は外国人留学生が占めている。今回訪問したパリ国際大学都市もこうした多数の外国留学生のために存在している。フランスの大学はバカロレアを有する全ての学生に門戸を開く一方で、入学以降の教育課程そのものが選抜としてみなされる傾向にあり、卒業には相当の努力を要する。

次にグランゼコールはエリート養成機関にあたり、先に述べた大学入学資格取得後グランゼコール準備学級で 2 年程度学んでから各グランゼコールの実施する試験に合格して初めて入学が認められる。原則的に大学入学資格を持っているだけで入学できる大学との違いはここにある。また、国立のほか私立も多く存在している点も大学と異なる。グランゼコールは比較的幅広い守備範囲を持つ大学に対し、高度な専門教育を行うことで知られ、各分野で世界的な評価を受けている。

その他各種専門学校では美術やデザイン、建築の専門学校などがあり、入学難度の高いものから幅広い学生を受け入れるものまで実に様々存在している。

4 . ボローニャ宣言とフランスの大学

1999 年にイタリアのボローニャにおいて 25 カ国の教育大臣が集まり、高等教育について「学士 3 年、修士 5 年、博士 8 年」という共通制度（LMD 制度）にむけて各国が協調することが確認されている。各国で極めて複雑で外部から一律の認識ができない状況を受けて、学位の国際的認証を行うこと、学生及び教員の流動性を高めること、高等教育の質的改善等を目的としている。これに基づいて欧州単位互換制度（ECTS）やセメスター制度の導入等が実施された。

5 . パリ国際大学都市



) 概要

名称 : Cité internationale universitaire de Paris

住所 : 17, bd. JOURDAN 75014 Paris

設立 : 1925 年

H P : <http://www.ciup.fr/>

パリ国際大学都市(以下、大学都市)は1925年に当時の文部大臣であったAndré HONNORAT氏によって提唱され設立されたパリ大学付属の学生寮群である。パリ14区でも最南端の地に34ヘクタールに及ぶ広大な敷地内に38もの建物があり、約5600人を受け入れることが可能となっている。ここでは世界各国の留学生を受け入れ、学術研究の基盤とすると同時に国際交流の場としても活用されている。日常生活において必要なものはほとんど大学都市内に揃っており、敷地中央にある中央館には図書館やプール、食堂、劇場まで完備されている。各学生寮は各国の名前を冠しており、それぞれの国柄や文化を反映した建物となっている。

大学都市全体の運営はパリ大学に依存しているが、館によってパリ大学が直接管理運営する直轄館と各国政府等の運営する非直轄館があり、日本館は後者にあたる。元々は各々館名の示す通り各国政府機関等の管轄化にあったが、資金面での問題等により大学都市に管理運営を委託したものが大学都市の直轄館

である。現在では直轄館が 13 館、非直轄館が 22 館となっている。

) 日本館

大学都市の中には日本館も存在しており、今回は館長の永見先生にお話を伺うことができた。

日本館の正式名称はパリ国際大学日本館 - 薩摩財団となっている。当時資金繰りに苦慮した日本政府に代わり、実業家の薩摩治郎八氏が私財を投じて建設したことにちなんでいるそうである。城郭をイメージした日本館は地上 7 階地下 1 階からなる建物で、フランス人建築家ピエール・サルデューによって 1929 年に完成している。戦後日本政府の予算の下修復され、現在に至っている。建物の周囲は 1825 平米の日本庭園になっており、パリの中であって日本の風情を感じることができるようになっている。68 ある居室の他、1 階には大サロンと図書室のほかアトリエが設けられており、館長室が 2 階にある。大サロンと廊下突き当たりにはエコール・ド・パリとして有名な藤田嗣治の絵が飾られている。『欧人日本へ渡来の図』と『馬の図』である。2000 年に修復作業を行い、往時の美しさを取り戻している。これらの絵を見るために日本館を訪問する人も少なくないそうである。



< 馬の図 >



< 欧人日本へ渡来の図 >

) 受け入れの実情

大学都市は留学生の受け入れを主たる目的としているが、希望すれば誰でも入居できるわけではない。今回日本館館長の永見先生にお話を伺ったところによると、学生が大学都市に入居する場合、修士以上であり、3 年間まで入居が可能となっている。研究者では博士号取得者でパリ市内の研究機関等で研究を行うもの、となっている。毎年 20~30 人程度を受け入れているが、入居者次第であるため年によって人数の多寡は若干生じる。志願者は毎年大体 60~70 人程度で倍率は概ね 3 倍とのことである。なお、入居時に条件として明示はしていないが、フランス語はできて当然のようである。これは国際大学都市どこの館に入っても全て共通語はフランス語であり、フランス語ができなければ大学都市

で生活することは事実上不可能となっている。また、入居者を偏らないようにする努力もなされているようで、男女比、出身大学、出身地域、研究分野などが考慮されている。しかし、修士学生が少なかったために以前1名を受け入れたものの、フランス語があまりできないために馴染めず、結局1年で出てしまったということもあったようである。また、書類選考であるため提出書類を非常に重要視しており、この中でも指導教員の推薦状を特に重視しているとのことである。最も身近で学生の研究を見ている教員の推薦文によって決めている部分もあるそうである。将来、日仏交流の架け橋に足る人材を受け入れたいという館長の意思が強く感じられた。

大学都市には各国の名前を冠した館があるため、まず入居にあたっては自国の館に申請を出すことになる。各館では自国の学生を館全体の70%以下でしか受け入れてはならない決まりになっているためお互いに希望者を交換し受け入れているそうである。

）生活環境と国際交流

日本館には15平米の居室48室、17.4平米の夫婦部屋4室、研究者用一人部屋7室、約11平米の小部屋9室がある。どの部屋にもベッドに机、本棚、タンス、電話等生活に必要なものが取り揃えてある。また、共用スペースにはキッチン、シャワー、トイレが男女別に設けられていた。地階には有料の洗濯機、乾燥機が備え付けられている。居室のシーツは二週間に一度交換され、専属の掃除人が週に二度室内の清掃と毎日のゴミ収集を行っているそうである。訪問した木曜日は各部屋を掃除しているところであった。

食事は近郊に大型スーパーがあるため食材を買ってきて共用キッチンで調理できるほか、大学都市本部の食堂やスペイン館付属の食堂も利用できるそうで、400円程度で食事ができるようである。

大学都市は留学生や研究者に住居を提供するのみではなく、国際交流にも非常に力を入れており、日本館だけでもほぼ毎週のように何かしらのイベントが実施されている。大学都市全体では年間に800にも及び、その内容もコンサートや展示会といったものから、各国の文化を紹介するものまで多種多様である。強制ではないが、居住者にはできるだけこれらのイベントに参加することが求められている。ただ自分の世界で研究をしていれば良い、というわけではない。また、各館ごとに自治組織として居住者委員会を設置している。居住者委員会は文化・スポーツ活動の実施や住環境の改善等について館長と協力しているそうである。



居室の様子 ©B.GALERON VMF

) 図書室

日本館には図書室も併設されており、1階の開架図書室に約5000冊、その他階等に5000冊の計1万冊程度を所蔵している。170程度の定期刊行物も所蔵しているが、定期購読しているものは『思想』のみとのことである。蔵書の多くは日本文学と日本国内で出版されたフランスに関する文献、戦前から今日に至るまでのフランス人研究者による日本研究の成果等であり、定期刊行物は学会の紀要等の論文集になっている。現在年間予算は約30万円程度であるとのことであったが、これについては館長の裁量によるところが大きいようである。

蔵書内容では主に日本語の本であった。当然フランス語も英語も読める人が住んでいるわけではあるが、やはり文学系の学生は日本語で読んだほうがイメージしやすいということもあるそうで、日本語の本が多く揃えられているのである。蔵書についてはその大半を寄贈に依存しており、歴代館長や関係者による著書が多数を占めていた。一方、居住者からのリクエストに関しては、辞書のような必ず必要となるものについては随時購入しているが、基本的に希望に合わせて図書を購入するということには行っていないとのことであった。フランスにあるためフォントの違いなどで目録登録は遅れており、現在もカード目録に頼っているそうである。ILLには参加しており、フランス国内からの複写依頼も少なからずあるそうである。

居住者は居住者カードを提示すれば参考図書、辞典類、美術書、雑誌の最新号などを除き5冊まで2週間借りられる。居住者以外でも貸し出しは可能であるが、身分証明書と住所を証明できるものを提示し、30ユーロの小切手を保証金として預ければ借りられるそうである。パリでは日本語の本は貴重であるた

め希望は多いそうである。また、大学都市の国際館にある図書室でもいくらかの日本語資料があるそうである。

図書検索ではフランスの大学図書館の共同目録に SUDOC(Système universitaire de documentation)があり、専門書の検索ができる。自身の所属している大学にない場合でも登録すれば利用可能となることが多い。その際には身分証明証や住所を確認できるもの、指導教員の推薦状などが求められるようである。このほか、パリ市内に存在する 60 余りの市立図書館では共同目録が構成されており、貸出カードはこの共同目録に参加する全ての館で有効であるため、他館所蔵の図書も利用可能である。閲覧のみであれば登録は不要となっている。

) 管理運営

非直轄館である日本館は大学都市から財政面でも自治面でも独立しており、館長は外務省主導で候補者を決定し、パリ大学総長の承認を受けている。任期は 2 年で、慣習的にフランス文学系の教授が就任している。現館長の永見文雄氏は中央大学文学部教授である。日本館運営に関する大部分は館長に一任されている。収入の内訳は日本政府からの出資が 2 割、寮費収入が 7 割、その他雑収入となっている。支出面では 7 割近くが人件費とのことであった。その他、日本館主体の各種イベントや居住者委員会にも予算が割り当てられている。

6 . フランス国立図書館



）概要

名称：Bibliothèque nationale de France (François-Mitterrand Library)

住所：Quai François-Mauriac 75706 Paris Cedex 13

設立：1994 年

）フランス国立図書館の誕生

フランス国立図書館は 1368 年にシャルル 5 世のコレクションを起源とする歴史ある図書館である。16 世紀にフランソワ 1 世がフランス国内で発行された図書は必ず 1 部を王室図書館に納本するように定め、以来今日に至るまでフランス国内の図書は全てここに集約している。その間には絶対王政時代のリシュリユー、マザラン、コルベールといった宰相らのコレクション等も加えながら現在では 1000 万冊を超える世界最大規模の図書館となっている。フランス国立図書館は現在 5 つの館で構成されており、それぞれ「site Richelieu (リシュリユー館)」、「François-Mitterrand site (フランソワ・ミッテラン館)」、「Bibliothèque de l'Arsenal (アルスナル館)」、「Bibliothèque-Musée de l'Opéra (オペラ座館)」、「Maison Jean Vilar (ジャン・ヴィエール館)」となっている。今回はその中でも最も新しいフランソワ・ミッテラン図書館を訪問した。

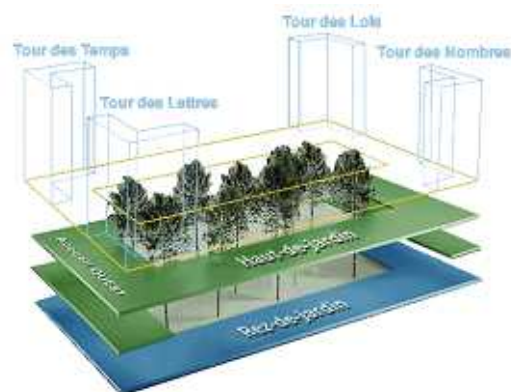
）フランソワ・ミッテラン図書館の開設

1980 年代には当時のフランス大統領であったフランソワ・ミッテラン主導の

下、パリ大改造計画（グラン・プロジェ）が行われていた。その中で 1988 年には当時手狭になっていた国立図書館（リシュリュー館）に代わる世界最大規模の図書館の建設を発表した。そして 1994 年ベルシー地区のセーヌ河岸に新国立図書館（フランソワ・ミッテラン図書館）が完成した。建物そのものは 1994 年に完成を見たものの、一千万冊にも及ぶ蔵書の移動やシステムの不備等で一般に開放されたのは 2 年後の 1996 年からである。

）建築

フランソワ・ミッテラン図書館はフランス人建築家ドミニク・ペロー (Dominique Perrault) の設計で、セーヌ河岸の開けた場所に一際大きな 20 階建て、地上 100 メートルの塔が 4 本建っているのが遠目にもすぐにそれとわかる。それぞれの塔には「Tour des Temps (時代の塔：北西)」、「Tour des Lettres (知識の塔：南西)」、「Tour des Lois (法律の塔：北東)」、「Tour des Nombres (数の塔：南東)」と名づけられており、上から見た時に本を開いた姿をイメージして造られている。4本の塔は10782平米に及ぶ中庭を取り囲むように建っており、地下には 700 台分の駐車スペースがある。敷地面積は 65300 平米、延べ床面積は 365178 平米で、中庭には 250 本の木が植えられている。



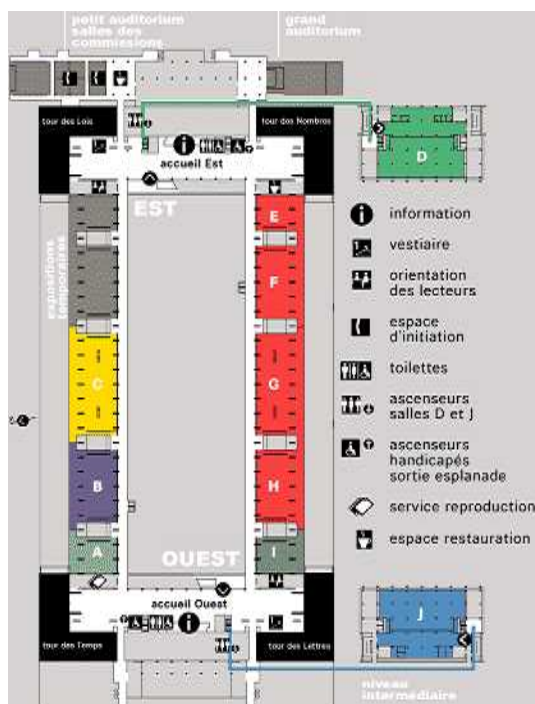
）利用

フランソワ・ミッテラン図書館への入り口はわかりにくく、屋上階からエスカレーターで 1 階に降りると入り口にあたる。デザインを重視しすぎたのか、一見しただけでは入り口がどこにあるのかわからない。晴れの日には屋上階から中庭を見ながら図書館に入ると気持ちよいが、雨の日には雨よけがないため、入り口までが遠く感じられた。入り口に着くとそこでは空港や著名な美術館のような持ち物チェックが行われていた。持ち物検査を無事に終わるとインフォメーションに出るのでここで館内のマップや利用方法を確認することになる。

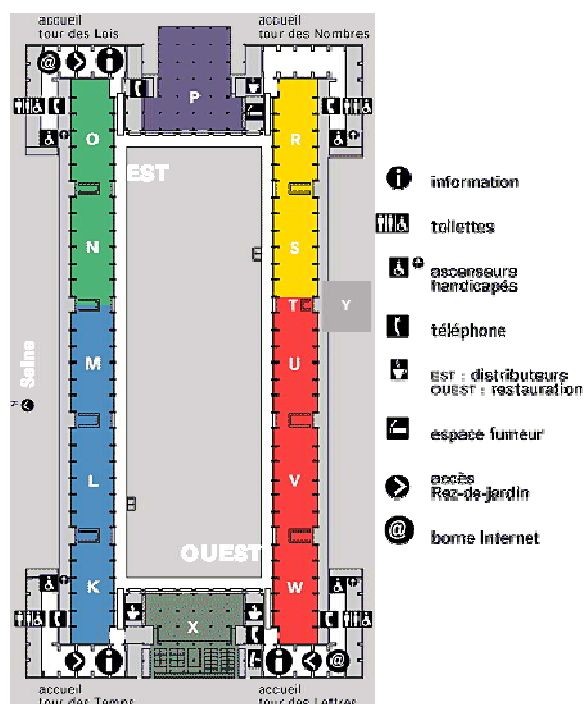
フランソワ・ミッテラン図書館には一般用の閲覧室と研究者用の専用閲覧室

がある。1階の一般閲覧室 (niveau Haut-de-Jardin) は 16 歳以上の全ての人に開放されている。受付窓口で身分証を提示し、規定の利用料を支払うことで入館カードを発行してもらえらる。金額は 1 日パスが 3.3€、15 日間パスで 20€、年間パスでは 35€ (16 歳 ~ 25 歳の学生であれば 18€) となっている。研究者用の閲覧室は 0 階にあり 18 歳以上であれば利用可能であるが、入館するためには司書による面接があり、研究内容の証明や教授の推薦や必要な文献等を求めるとのことであった。利用料は 3 日間パスが 7 €、15 日間パスが 35€ (一般席同様学割が有効で 18 歳から 25 歳の学生であれば 18€)、15 日間パス + 1 階一般閲覧席の年間パスが 45€ (学割 23€)、年間パス 53€ (学割 27€) である。フランスでは図書館を受益者負担という形で有料にして資料の充実を図っていることが多いようである。閲覧席数は全部で 3590 席、うち一般向け閲覧室は 1556 席で研究者用閲覧席が 2034 席となっている。一般開放スペースは 23000 平米、書庫等の保存スペースは 71000 平米にも及び約 2000 万冊を所蔵可能としている。

一般用の閲覧室は座席自由であるが、研究者用閲覧室は座席指定になっている。研究者用閲覧室がある 0 階へは 1 階のインフォメーションの脇にあるゲート (パリのメトロの改札のような造りになっていた) にカードを通し、その奥にある巨大な鉄の扉を二つ開くと広いホールに出て下りのエスカレーターで下りられるようになっている。



< 一般用閲覧スペース niveau Haut-de-Jardin >



< 研究者用閲覧スペース niveau Rez-de-Jardin >

フランソワ・ミッテラン図書館には 1000 万冊もの蔵書があるが、開架スペースで閲覧可能となっているのは一般用・研究者用合わせて 100 万冊弱となっており、残りは全て 4 本の塔の中に所蔵されている。必要な本は BN-OPALE PLUS(http://catalogue.bnf.fr/jsp/recherche_simple_champ_unique.jsp;jsessionid=0000yTziut2U2vCQj2c5-4a06i9:-1?nouvelleRecherche=0&nouveaute=0&host=catalogue)で検索し、窓口で取り寄せてもらうことになる。図書館は依頼のあった図書を塔の中にある書庫からゴンドラに乗せて閲覧室まで運び利用者に手渡すという形になっている。図書を未返却で退出しようとするときブザーがなり、出られなくなる仕組みになっていた。構造上、日光を避けるべき書庫が上層階にあるということは通常考えにくいことであり、当初批判も多かったようだが、木製の遮光板で全面を覆うなどしてこの斬新な図書館を成立させているそうである。塔の下層部分は事務所等に利用され、上層部が書庫として使われている。しかし、私が訪問した時点で全くの空きスペースになっている部分も多くみられ、かなり余裕を持たせた造りとなっていることが窺えた。

また、フランソワ・ミッテラン図書館ではマイクロフィッシュも多数所蔵していた。中世の貴重な写本等のオリジナルを保護するために貴重書は積極的にマイクロフィッシュにしているようである。マイクロフィッシュも図書同様にゴンドラに乗せて運んでいるそうである。

フランス国立図書館では私が訪問した時には、貴重書や著名な指揮者のタクトが公開されるなど図書館における企画展が充実しており、日本でよく行われる博物館の特別展のような印象を受けた。企画展は無料であるが、図書館の利用が有料であるため、利用者からの期待も大きいようで、訪れる人の知的欲求を満たすような努力を絶えず行っているようであった。フランス国立図書館 5 館はそれぞれに分野を持っており、それに合わせた展示が行われているようである。



タワーから降りてきたゴンドラが並ぶ



ゴンドラの様子



返却された図書はまたゴンドラに乗って書庫に戻される 図書館内に設置されていた検索端末



可動式木製遮光版で本を保護している

その他、フランス国立図書館の大きな取り組みに Gallica がある。Gallica はフランス国立図書館の提供する電子図書館である。著作権の切れた蔵書を電子化して世界中に公開するサービスを行っている。その性質上、18 世紀以前のフランス著作が中心となっているが、日本国内ではまず見ることのできない貴重な資料を自由に閲覧できるのは大きな利点であり、最終的には 30 万点にもなるだろうということであった。現在バージョンアップした Gallica2 が公開されている。2008 年末には検索機能等が強化された Gallica2 に各種機能を統合する予定である。

7. 最後に

フランスの先進図書館や他に類を見ない留学生受け入れ機関の見学ができたことは私にとって非常に貴重な経験となった。特にフランスではメトロの窓口等、日本人の感覚からすれば対応に不満を抱くことも多々あるのだが、フランスワ・ミッテラン図書館ではそのようなことは一切なく、プロフェッショナルとしての姿勢には学ぶところも多かった。また、外国人留学生が相対的に少ない日本ではみられない、留学生だけで構成される大学都市にはこれから益々加速することが予想される大学の国際交流の可能性を感じることができた。その上で、茨城大学の学生に国際性を身に付けてもらう為には海外の大学との単位互換等制度の一層の拡充が必要ではないかと感じた。今回訪れた各機関は確かにパリという地にあってこそ成り立つという部分もあったが、利用者を飽きさせない企画展示や図書館員としての姿勢など茨城大学としても見習い、一層の学生サービスに結び付けられるものは取り入れていきたいと感じた。

最後にフランス訪問の機会を与えてくださった関係者の方々と快く送り出して下さった図書館の皆様、貴重なお時間を割いて案内して頂いたフランス国会図書館の方々、国際大学都市の方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

2008年3月14日

(次頁にその他の写真を掲載)



大学都市正面入口
(後ろに見えるのは Maison internationale)



都市内案内図
(広大であるため至る所にこの案内マップが設置されていた)



Fondation Emile et Louise Deutsch de la Meurthe



Résidence Lucien Paye 入口のレリーフ



Maison de Tunisie



ギリシャ神殿をイメージした Fondation Hellénique



Maison des Provinces de France



Fondation Rosa Abreu De Grancher



Maison des Étudiants de l'Asie du sud-est



Collège Néerlandais



Maison des Étudiants Arméniens



屋外公衆電話も7台程設置されていた



フランスらしく、看板にも文字やデザインに凝ったものが多くみられた Maison du Mexique



Collège Franco-Britannique



Collège d'Espagne



Fondation Biermans-Lapôte



Maison de l'Institut national agronomique



Maison du Japon



Maison des étudiants suédois



Fondation Suisse



Fondation Danoise



Maison de l'Inde



テニスコートを始め各種運動施設も整備されていた



緑と巨大ビルが同居する BnF



屋上階からこのエスカレーターを下りて入口へ



待ち合わせ場所になった BnF のモデル



企画展示されている書物



研究者用フロアの通路



企画展は随時行っているとのこと